

麗澤瑞浪に学んで



卒業を前にした LHR(ロングホームルーム)で「麗澤瑞浪に学んで」と題して6年生が感想文を書きました。6年担任会で読ませていただきましたが、どれもすばらしいものでした。その中で各クラス2編ずつ選び、卒業記念誌として冊子にすることにいたしました。最後まで読んでいただければ幸いです。

卒業生の皆さんの今後の幸せをお祈りいたします。「みなさん、おめでとうございます。」

(掲載はクラス順です)

平成28年2月29日

麗澤瑞浪高等学校

麗澤瑞浪に学んで

6年1組 木村 謙太郎

この学校に高校から入学し、僕は様々な面において良い方向にステップアップしたと思う。きっとこの成長は、麗澤瑞浪に入学していないと起こらなかったと思う。まず第一に、自立した。寮生活を始めて最初の3ヵ月ぐらいは、とても苦労した。自習時間や点呼があり、決まった時間に決まったことをしなければならず、家で学習などしたことがない僕にとっては、とても苦痛であった。掃除、洗濯はもちろんのこと、同じ部屋でおっかない先輩と生活し、怒られないように生活することに何より神経をすり減らした。しかしそういった生活にも慣れていき、いつの間にかちょっと面白い話で先輩に笑ってもらったり、自習時間にしっかり机に向かって座り、勉強に励むようになった。これはとても大きな進歩であると思う。そして何よりこれは麗澤瑞浪の寮生活を通してしか得られなかっただろう。また、親と離れて生活することにより、親のありがたみが分かり、感謝の心を持つようになった。

麗澤瑞浪は、何をやるにしても環境が整っているのだから、自分の頑張りたいことを頑張れる。これは当たり前のように思われるが、感謝すべき所であると思う。僕は、バスケットボール部に所属していて、熱心に部活に取り組んだ。高校から始めたので、かなり下手だったが、コート丸々使って練習した。高校時代に本気で部活に取り組んだことは一生忘れないと思う。勉強するにしても、学校に自習スペースが設けられていて、長期休みには進学講座などがあるので、集中して取り組むことができる。このように麗澤瑞浪の環境は素晴らしい。何事にも本気で取り組むことができる。そして今僕は受験勉強に本気で取り組んでいる。もし麗澤瑞浪に入学せず、そこら辺の高校に行っていたら、今頃はきっと田舎のイタイヤンキーになっていたかもしれない。本当にこの学校を選んで良かったと思う。

今、世の中の高校生、そして一部の大人もスマホに夢中になって、しっかり他人と向き合っていないように見える。一度僕が衝撃を受けたのが、カップルと思われる高校生が一言も発せず、気まずそうにスマホを眺めていたことだ。これはきっと麗澤瑞浪の特に寮生だったら起こりえない。なぜなら否応なく他人とコミュニケーションを頻繁に取らなければならない環境にあるからだ。この時本当にこの学校に入ってよかったと思った。麗澤瑞浪で培ったコミュニケーション能力、これも間違いなく僕の財産となるだろう。

麗澤瑞浪に学んで

6年1組 佐藤 みのり

私の高校三年間は部活動中心の生活となりました。朝も放課後も休日も、目標達成のことばかり考えて取り組んでいました。選手として出場できる試合が無くなった今、振り返ってみるとそれだけ目標に懸けて取り組めたのは、学校の先生方や友達に支えていただいたことが本当に大きかったと改めて感じました。

先生方は、公欠の多い私達のために公欠の日の授業をまとめたプリントをくださったり、大変だろうけど頑張れなどと声をかけてくださったりして、私は恵まれているなといつも感じていました。友達は、ノートを見せてくれたり、分からないところを教えてくれたりと、困ったときにはいつも助けてくれました。このように、私が苦しいときや困っているとき、必ず誰かが手を差し伸べてくれました。その助けは見返りを求めるものではなく、当たり前のようにしてくれていました。それでいて、私達の大会の結果を聞くと、私達と同じように喜んでくれたり、悔しがってくれたりして、次への力をもらいました。改めて振り返ると、本当にたくさんの方からたくさんのもを頂いてばかりだった

のだと気付きました。自分が頑張っているように見えて、頑張る時間や環境、力を与えてもらったのだと思います。そのことに対し感謝の気持ちでいっぱいです。

麗澤瑞浪に入学し、最高道德というものを初めて知りました。見返りを求めずに道德を実行するというのは、普通の人間である私に簡単に出来ることではないと思っていたし、今でもそう思っています。私の三年間は、その最高道德を自然と実行している方々に支えられていた時間だったのだと思います。同様に見返りを求めずに支え続けてくれた存在として、両親のことも決して忘れてはならないと思います。中学の頃までは家族なのだから当たり前だと思っていたことも、それが有難いことなのだとここに来て感じられるようになりました。この想いを忘れないようにしていきたいです。

これから私は大学に進み社会に出ていくことになると思いますが、与えていただければ良かったこれまでから、少しでも人の頑張りや喜びの支えになれる人になっていきたいと思います。

麗澤瑞浪に学んで

6年2組 梅木 恭明

約三年間この麗澤瑞浪という学校で、また、寮で過ごしたことで得たものは多い。私は野球部員として部活寮で生活をし、勉学と部活動の両立を目標として過ごしてきた。そんな夢を追いかけ続けてきた寮生活、また、学校生活に終わりが訪れる。

先に多くのことを学んだと書いたが、その中でも大きなものを、野球部を通じて、寮生活を通じて、学校生活を通じて、という三つの観点から記す。

第一に野球部を通じて学んだこと。これは三年間共に闘い、時間を過ごしてきた仲間たちの存在と、そのかけがえのなさだ。元々一人でいることを好む私は、入寮、入学当初、他人と関わるつもりはなかったと言っても過言ではない。そんな私が彼らと共に夢を追い続け、今、各々の故郷へと帰っていく。今のように毎日顔を合わせることができなくなると考えると、さみしさと切なさがこみあげてくる。彼らはまぎれもない、唯一無二の私の宝であり、財産だ。

第二に寮生活を通じて学んだこと。多くの者が思うであろう、親のありがたみと偉大さだ。両親は、幼少の頃から野球を続け、中学生の時はクラブチームに入っていた私のために、練習の日は車で送迎してくれ、高校では私立の学校に入学、さらには寮生活をさせてくれた。また、一つに何万円もかかる野球道具をずっと買い与え続けてくれた。私のやりたいことに対して、背中を押し続けてくれた。私のために一体どれだけ汗水たらして働いてくれたのか。そう思うと感謝と尊敬の念で胸が一杯になる。いつまでも変わらぬ愛情をそそぎ続けてくれる両親に、僅かなことからでも行動を起こし、いつかしっかりとした形で恩返しをしたい。

第三に学校生活を通じて学んだこと。これは目標を持ち続けるということだ。目標や夢がなければ、あるのは惰性で過ごすつまらない日々だ。ただ過ぎていくだけの無駄な時間ほど必要のないものは他にないと思う。夢や目標があるから何をすべきかが見えてくる。本当に必要と思えることをするのに使う時間は、きっと充実しているはずだ。それはこれから先も同じはず。大学生生活、また、この先続いていくであろう人生を、大きな夢と目標を持って日々精進していきたい。

思えば長いようで短い高校生活だった。逃げたくなるほど嫌なこともあったし、何もかも投げ出そうとしたこともあった。だが、これほど本気で過ごしてきた時間はなかった。今までの人生でこれほど充実した時間はなかった。この三年間で学んだことは、きっとこれからの人生で生きてくるだろう。そしてここ

で得たものは私の一生の宝に、かけがえのない財産になるだろう。これらを胸に刻み、これからの人生に希望と夢を持って進んでいきたい。最後に、私のことを支えてくれた全ての人々に感謝を込めて。

麗澤瑞浪で学んだこと

6年2組 矢崎 越百

私が麗澤瑞浪で学んだことは、大きく分けると二つあります。

一つ目は、自分は周りの人々に支えられているということです。私は寮生活をしていますが、入寮した時は、右も左も分かりませんでした。そのため、寮生活の仕方や寮での仕事などを先輩方から教わり、支えてもらいながら生活していました。

寮生活では、自分のことは自分でしなければなりません。部屋の掃除や洗濯など、今まで親に頼ってばかりでほとんど自分でしたことがありませんでした。親にまかせてばかりいたので、寮に入る前は簡単だと思っていたことも、自分でやってみると実際は思っているように楽なものではなく、大変でした。いつも親に支えてもらっていたということを感じました。

また、悩んだりストレスが溜まったりしている時には、自分だけで考えるのではなく、同級生に相談したり、一緒に話したりしました。僕の寮生活は、同級生のおかげでとても楽しい時間でした。私の生活を一番支えてくれたのは、同級生の存在だったと思います。

二つ目は、道徳教育で学んだ、心の持ち方についてです。私は初め、モラロジーについて学ぶと聞いたとき、宗教に洗脳されるのではないかと考えていました。しかし、そのような事は一切なく、道徳教育を通じて私は人として成長することができたと感じています。

道徳教育では、心の持ち方を変えるということや人の良いところを見つけるということを学ぶことができました。人間は、心の持ち方、物事の捉え方を変えることによって成長できると学んでから、私は今までとは違う心の持ち方で生活するようになりました。すると、いつもなら周囲で起こる嫌だと感じることも、自分にとってこれはプラスになるのだと感ぜられるようになりました。おかげで、物事を嫌だと感じる事が少なくなり、多くの体験をできるようになりました。

私は、この麗澤瑞浪高等学校に入ることができてよかったと感じています。初めは厳しくて抜け出したくなるような寮生活でしたが、三年間続けてきたことで、多くの仲間ができました。ここに来ることがなければ出会うことのなかった仲間です。

今まで麗澤で得ることのできた多くの経験や知識は、今後社会で何らかの形で役に立つと思っています。私にとって麗澤瑞浪高等学校に入学し、生活できたということは誇りです。

私は麗澤で学んだことを大切に、社会の役に立てられるよう努力したいです。

麗澤瑞浪で学んだこと

6年3組 藤本 貴也

私は、この麗澤瑞浪高校で沢山のことを学びました。その中でも、特に学んでよかったと思ったのは「自立」と「礼儀」、「思いやり」です。

私は、麗澤瑞浪の学生寮で六年間過ごしました。親元を離れ自分と同年代の人と過ごす中で、親の有り難さと、周りとの接し方、自分のことは自分でやるということ学びました。中学入学当初と比べると、見違えるように成長していることが自分でもわかります。麗澤瑞浪の学生寮で学んだ「自立」

という力は、これから先、社会に出ていく私達にとってとても大切なものになると思います。

「礼儀」は、大学受験などでもとても助かりました。日頃から目上の人を敬う生活を送るため、敬語もしっかりと身につきました。面接のときに詰まったりしてもすらすらと敬語を使えたため、とても助かりました。その他にもいろいろな人と接するとき、相手に好感をもってもらえるような振る舞いをできるようになりました。人とコミュニケーションを取っていく中で、第一印象や、言葉使いはとても大切なので、大きなものを学べたと思います。

「思いやり」の心は、麗澤瑞浪に来て一番成長したものだと思います。寮での生活は、自分の思い通りに行かないし、自分中心だと上手くいきません。小学校の頃は、自己中心的な考えや行動をとっても特に大きな問題はありませんが、寮で生活するということは、家族ではない他人と一緒に同じ場所で衣食住を共にするということであるため、独りよがりな行動を取ってははいけません。相手がされて嫌いなこと、うれしいことなどを知り、お互いが気持ちよく生活することができる環境を作っていくことが大切です。その思いやりは、寮生活や学校生活だけにとどまらず、どんな環境でも役立つ力です。相手を思いやって行動することができれば、必ず人と良い関係をつくれると思います。

これらの三つが、私が麗澤瑞浪で学んだことの最も大きなものです。私が麗澤瑞浪で六年間過ごしてきた経験から、この学校は社会での生き方を教えていると思います。自律や礼儀、感謝や思いやりという、人と接して生活する中で欠くことのできないものばかりを学ぶことができます。

人としての成長、さらに将来を見据えるためにも大変良い学校だと思います。麗澤瑞浪で学べてよかったと思います。

麗澤瑞浪に学んで

6年3組 鈴木 茉利奈

私が、この麗澤瑞浪に入学して、三年間が経とうとしています。長かったようで短かった三年間でした。麗澤から教えてもらったことは、数えきれないほどあります。その中で、私が一番重要だったと思うことを挙げたいと思います。それは、麗澤瑞浪の柱とも言える道德教育についてです。他の高校へ行っていたら体験できないことだと思います。

最初、ニューモラル学習は、絶対にやる必要がないし、時間の無駄だと思っていました。高校生にもなって道德を勉強するなんて、小学生みたいで嫌いでしたし、どうしてこんなことを学ぶのか悩んで、そもそもどうして麗澤瑞浪に入学したんだろうと考えることもありました。しかし、そのような生活を送っていくことで、自分の中に慣れが生まれ、何も感じなくなりました。そんなとき、地元の友人に「麗澤瑞浪は、ただの宗教校だ。道德なんてしても何も役に立つわけがない。」そう言われました。私は、道德なんて役立つわけがないという言葉に無性に腹が立ち、「道德を学ぶことで、先人の考えや思いを学び、その考えを今の自分に生かすことができたなら、役立つわけがない。」無意識にこう言っていたそうです。この時初めて私は、自分もやっと本当に、麗澤瑞浪の生徒だと胸を張って言えるような気がして、とても嬉しく思ったと同時に、入学できて本当によかったと心から思うことができました。入学してから、どうしてもいいようにやりすごしてきた道德の授業は、自分が知らない間に脳に入ってきて蓄積されており、それらがこのような形で現れたとき、道德には凄い力があるのだと実感しました。

また、私が今、はっきりと進路を決め、受験できたのもこの道德教育があったからだと思います。

私の将来の夢は、介護福祉士になることです。幼い頃からそう思っていました。両親や周りの友達には伝えることもなく過ごしていました。その頃の自分には、なぜその職に就こうと思ったのか、なぜその職に魅力を感じたのか、はっきりと言葉にして言うことができなかったのです。しかし、この道徳教育を受け、自分の祖先の大切さや目上の方を敬う気持ちを持つことの大切さなどを学び、この職業は自分の夢なのだと思えるようになりました。これらのことが、私が麗澤瑞浪で学んだことです。麗澤瑞浪は、誇れる高校です。

麗澤瑞浪に学んで

6年4組 加藤 翔也

僕が麗澤瑞浪を受験すると決めたのは中学3年の10月頃でした。サッカー、勉強共に高いレベルで文武両道をしたいと思い、私立である麗澤瑞浪を選んだわけですが、この学校についての知識は無いに等しい状態での入学でした。知り合いも2、3人。まさにゼロからのスタートでした。それからはや3年が経ちます。今になって、この麗澤瑞浪での3年間は僕にとってかけがえのない時間になったと心から思います。

部活では、3人の恩師、たくさんの先輩、仲間に出会いました。喜び、苦勞、苦悩を味わった部活は、僕を身体的にも精神的にも大きくしてくれた時間であったと思います。文武両道を目指していながらも、入学当初の僕は部活ばかり熱心に取り組んでいました。入学1年目は、そんな毎日を過ごしていた気がします。それにもかかわらず、僕は世間で難関大学と言われる大学への進学を目標としていました。そんな僕の力を信じ、何とかして僕を成長させようとしてくださるたくさんの先生に出会えたことも幸せだったと思います。色んな人が本気で指導、応援してくれていることを日々感じる事ができた僕だったからこそ3年間頑張ってきたらされました。今後の僕の道がどうであれ、この3年間の自分はこれからの自分の幹となると思います。

麗澤瑞浪では、色々な行事を通してたくさんの経験をしました。一つ例を挙げるとするならば、やはり台湾修学旅行です。麗澤瑞浪にとって初の台湾修学旅行に行けたことをすごく嬉しく思います。飛行機に乗ること、海外に行くことが初めての僕にとって、この旅行はとても新鮮で貴重な時間となりました。台湾の人と英語で意思を通じあえた時の喜びは忘れることができません。台湾の文化を体感することは日本の文化を改めて考える機会となりました。礼儀など今まで当たり前にしてきたことは素晴らしいんだということに気付くことができました。しかし、何よりも強く感じたのは自分の未熟さです。英語が全く話せない。もう大人だと思っていた自分は海外に行けばうまくコミュニケーションすらとれない。こうやって自分自身を、日本を、客観的に見れたことはすごくいい経験になりました。

麗澤瑞浪で学んだことを忘れずに、感謝を忘れずに、大学生活を充実し、実りあるものにしたいと思えます。ありがとうございました。

麗澤瑞浪に学んで

6年4組 上坂 紘世

「ありがとう。」と言えば、「どういたしまして。」ではなく、もう一度「ありがとう。」が返ってくるこの学校で六年間を過ごし、私が学んだ事は、やはり「感謝」をすることであろう。

感謝してくれたことに感謝をする。今でこそ自然にどういたしましての代わりにありがとうが口に出るようになったが、入学した頃は絶対に慣れる事はないだろうと思っていた。しかし、普段よりも多くの感謝の言葉を口にするうちに気がついたことがある。それは感謝すべき事の多さ、そして今まで自分を支えてくれていた人の多さである。一度、一日に何回のありがとうを言うかを数えてみたら百を超えた事がある。落し物を拾ってもらうなどの普段の感謝の気持ちから、部活の大会の結果をまるで自分の事のように喜んでくれた人へ。自分がどれだけ大変な思いをしても、私のためを思い、夜遅くまで指導をしてくれた人へ。そして、私の夢を分かってくれた人へ。感謝すべき人・物を数えてみると、百を超えるのも納得できた。この事はつまり、今まで自分を支えてくれていた人の数もきっとこれ以上になる事も教えてくれた。

六年生になってからの道徳の授業で「ありがたさ」についての授業を受けた。そこでも感謝すべき事の多さを学んだが、最も心に残ったことは、「人は皆それぞれの役割を持ち、全てが支え合って生きている。これは良い事だけではなく、悪いと思えるような事も。だから全ての事に感謝をしなければならぬ。」という一文だ。その時初めて私は、自分にとって直接利になる物にしか感謝してこなかったことに気付いた。悪いと思えるようなこと、自分にとって困難となるようなことが起こっても、ただ不満に思い、弱音を吐くだけでなく、これは自分の運命を建て替える良い機会であると思い、今までの自分の行動に悪いところが本当に無かったのかを思い返すことが大切だということ学んだ。

この学校はたくさんの有り難さを教えてくれた。親が近くにいない。自分の事は自分でしなければならない。以前まで当たり前だったことが全て、有り難い事だと分かった時に初めて、今まで自分がどれほど多くのものに支えられてきたのかに気付くことができた。そして、何事にも感謝することも学んだ。家族、先生、友人、支えてくれた全ての人、そして感謝を教えてくれたこの学校に感謝をしてこれからも生きていきたい。

麗澤瑞浪で学んだこと

6年5組 三尾 勇樹

入学してからもう3年が過ぎてしまったということに素直に驚き、この場所から離れなくてはならないことを名残惜しく思います。そんな充実した時間を過ごさせてもらい、私を支えてくれた仲間や先生方、両親にまず心からのお礼を言います。

「ありがとう、感謝します。」

麗澤瑞浪で私が得たことは三つ。一つ目は、「何かを本気で追い求める」ということです。何となくの時間を過ごすのではなく確固たる目標があり、その為に誘惑や自分の心に負けず進んで行く。こんな仲間が私の周りに沢山いてくれたこと。その中で一緒に努力出来たことを何よりも誇りに思います。頑張っている人を素直に応援し合える雰囲気は、他のどんな学校を探しても地元の友人の話も聞いてもなかなかあるものではありません。

二つ目は、「人を思いやる」ということ。これは寮生活を通して得ることが出来ました。SNSの普及で人と人とが直接関わる機会が減り、人間関係が希薄になった今日の日本。その中で、通信機器に頼らず毎日24時間同じ空間を共にして得たものは掛け替えのない財産です。自分だけ良ければではなく、仲間を思いやり、お互いが充実感に満たされる、こうして初めて本当の「幸せ」を実感することが出来ました。未熟な高校生同士、些細なことでぶつかり合うことも当然ありました。そのことで

すら、今となっては大切なものに思えます。

三つ目は、「感謝する」ということです。親と離れていたからこそその存在の大きさを感じています。中学の時は照れ臭かった感謝の言葉も、素直に面と向かって言うことが出来ます。そして、寮やクラスの中でも日常的に相手に対する感謝の思いを持つことが出来ます。私だけでなくきっとみんながそうだと思います。普通なら恥ずかしいような善い行いも、何のためらいもなくすることが出来それに対して「ありがとう」の言葉が飛び交う、そんな場所で私は3年間を過ごしました。

今後社会に出ても、麗澤瑞浪のような環境、人に囲まれることは無いと思います。しかし、これまで自分自身がやってきたこと、仲間や先生方に頂いたものを大切に生きていきます。そうしていればきっとこの3年間に勝るとも劣らない幸せな人生を送れるのではないかと思います。

ここに來られて本当に良かった。

麗澤瑞浪で学んだこと

6年5組 細江 凜

私の高校3年間はどんなものだったか考えてみる。

進学クラスで過ごした高校1年生。部活動で全国一位を目指す仲間と同じ教室で過ごし、好きなことに一心不乱に取り組む姿に心を奪われた。その姿は憧れであり、同時に目標だった。だから、私が部活動の大会で賞を取った時に、その仲間から言われた「おめでとう」という言葉は本当に嬉しかった。私はあの時の気持ちを絶対に忘れないだろう。

選抜クラスで過ごした高校2、3年生。夢を叶えるため、脇目も振らず勉強に向かう仲間の姿に圧倒された。一緒に頑張る仲間がいたから、一年間の遅れをなかなか取り戻せず辛い思いをした時も、勉強を止めたい、とはただの一度も思わなかった。

今、振り返ってみると、私の高校三年間は人生において欠くことのできない、とても掛け替えのないものだったと思う。そして、こんなに素敵な高校三年間を過ごすことができたのは、家族や友達、先生など、私を支えてくださった方々の存在があったからだ。どんな時も、自分がやりたいことを一生懸命やりなさいと応援してくれたお父さんとお母さん。悩みを相談したら私よりも一生懸命考えてくれた友達。温かい言葉、時には厳しい言葉をかけ、私を激励してくださった先生方。そんな方々に支えられ、今、私はここにいる。

私の将来の夢は小学校の教師になることだ。夢に向かって進む途中、辛いことがあったら、麗澤瑞浪での生活を思い出すだろう。そして、私を支えてくださった、たくさんの方々のように、今度は私が子供たちを全力で支えていきたいと思っている。

麗澤瑞浪に入学しなければ、きっとこんなふうに思うこともなかつただろう。麗澤瑞浪で学んだことは数えきれないほどたくさんある。その一つ一つが「私」という人間を構成しているのだと、改めて思う。

かけがえのない三年間にありがとう。